

西日本における「昇り核」の方言：鳥取県青谷町とその周辺地域のアクセント体系

著者	松森 晶子
雑誌名	国立国語研究所論集
号	3
ページ	19-37
発行年	2012-05
URL	http://doi.org/10.15084/00000488

西日本における「昇り核」の方言： 鳥取県青谷町とその周辺地域のアクセント体系

松森 晶子

日本女子大学

国立国語研究所 時空間変異研究系 客員教授

要旨

「昇り核」はこれまで弘前、青森、雫石など東北各地で報告されてきたが、琉球諸方言を除き西日本には報告例がなかった。本発表は鳥取県鳥取市の青谷方言、および湯梨浜町の泊方言を、昇り核を持つ方言として記述することを提唱し、この地域にあらたに昇り核の n+1 型アクセントの体系が発達している現状を報告する。さらに本稿では、青谷周辺の地域（鳥取市の気高、湯梨浜町の長和田、別所）における 1～4 モーラ名詞の調査データに基づき、この地域のアクセントが、次のような特徴を共有していることを報告する。

(a) 助詞が連続した場合、その連結点にあらたな核が発生する。

(b) 1つのアクセント単位に2つ以上の H 音調が隣接して連続する場合は、最初（左側）の H 音調が優先的に出現し、その後ろ（右側）の H 音調は弱化する。

これらの特徴は、東京方言にも見られる。この事実に基づき本稿では、一見したところ表面の音調型については東京と異なるように見える鳥取県のこの地域の n+1 型体系が、実は東京方言といくつかの点で共通していることを示す。さらに、上述の (b) の特徴は、他のアクセント体系（少なくとも同様な n+1 型体系）において共通して見られる、アクセント体系の一般的特徴である可能性も示唆し、日本語の方言アクセントの記述研究にあらたな課題を提示する*。

キーワード：昇り核、鳥取県、重起伏、n+1型体系、句音調、類型論

1. 青谷方言の重起伏音調の実態

鳥取県鳥取市の気高、青谷から東郷池周辺（鳥取市の気高から湯梨浜町、そして倉吉市にかけての地域）は、広戸・大原（1952）の記述以来、周囲とは異なるアクセントが観察される地域として注目を集め、これまで室山（1969）、今石（1982）、森下（1996）などの記述研究がなされてきた。この地域の諸体系は、東京方言と同じく n+1 型体系を持っているが、その表面の音調型は東京のものとは異なる。次の (1) は、青谷方言の 3 モーラ語を代表として取り上げ、その音調型を示したものである。（以下、拍内下降を示すものとして○を使用する。）¹

* 本稿は、2009年9月26～27日に九州大学において開催された、第23回日本音声学全国大会における口頭発表をもとにして、その内容の一部を論文にしたものである。なお、本研究は科研費基盤研究(A)「日本語のアクセントとアクセント類型論」（課題番号 22242011、研究代表者：窪菌晴夫）の助成を受けている。投稿原稿を詳細に読んで、多くの有益なコメントと助言をくださった国立国語研究所の査読委員の方々に感謝いたします。

¹ 青谷、泊、別所、長和田などの方言では、無核の名詞、およびその名詞から始まるアクセント単位が、たとえばコーリ（氷）、コーリが、コーリも、コーリから、コーリだけ、といったように、特定の条件（コーリ（氷）、スモ一（相撲）の下線部のように CVV を含む構造がその内部にあること）を満たした場合に限り、高い平板な音調（●○●→●●●）となる。（一方、この傾向は気高方言の今回調査した話者には観察されなかった。）つまり、これらの方言では、重起伏音調（●○●）がある特定の音韻条件によって「消失する」、という傾向が観察されたのだが、この現象についてはさらにデータを集めたくて別途論じることとしたい。本稿では、これを「無核語の異変種である」と解釈しておくだけでとどめておく。

(1) 青谷方言の3モーラ語の音調

- (a) ミミズ ミミズが ミミズも ミミズから ミミズだけ ミミズまで
 (b) オヤコ オヤコが オヤコも オヤコから オヤコだけ オヤコまで
 (c) アヤメ アヤメが アヤメも アヤメから アヤメだけ アヤメまで
 (d) ムスメ ムスメが ムスメも ムスメから² ムスメだけ² ムスメまで

この青谷方言では、たとえば「オヤコが、オヤコも、オヤコから」などに典型的に見られるように、1つのアクセント単位内に2つのH音調を持つ音調型（以下、これを「重起伏音調」と呼ぶ）が観察される。これを、H（高い音調）とL（低い音調）（あるいは●と○）の2つの値を用いて記述すると、無核のミミズから始まる「ミミズが」も、有核のオヤコから始まる「オヤコが」も、両方ともHHLH（●●○▲）となってしまう、あたかも同じような高さの2つのH音調がそのアクセント単位に出現しているとしか記述できない。（実際に先行研究ではこれらを同じ高さのH音調と記述したものが多い。）しかし無核語と有核語ではそのH音調の実現の仕方に微妙な音声的な違いがあり、これはHとL（あるいは●と○）という2値的記述では報告しきれない。

一例として、名詞に無核の助詞「から」を付けた場合の音調を見てみよう。次の図1、図2は、それぞれ無核の名詞「蓬、車、蚯蚓、鼠」と、語頭に核がある名詞「柱、鳥、親子、柘榴」に、無核の助詞「から」を付けて言い切った場合の、青谷方言のピッチ曲線を示す。

まず、無核の名詞「蓬、車、蚯蚓、鼠」に「から」が接続した場合は、図1のようである。各文節の出だしのH音調とそれに続くL音調の間の落差はさほど大きくなく、二つ目のH音調とのピッチの落差も大きくない。つまり、アクセント単位内に出現する2つの山の間の谷間が浅い。

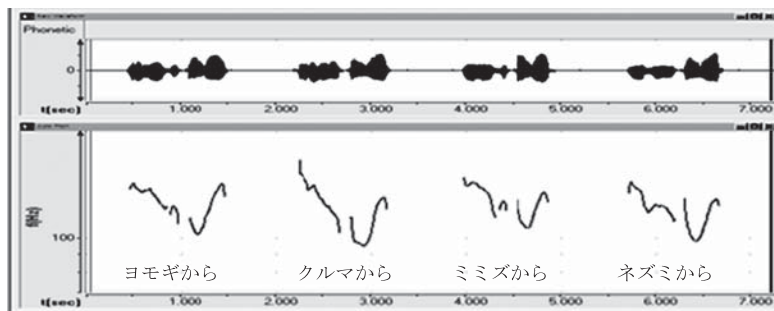


図1 無核型（蓬、車、蚯蚓、鼠）に無核の助詞カラが接続した場合の音調型

² 後に述べるように「ムスメ^{*}」は語末核の語であり、（後述する規則1によって）核を起点として2モーラ分高くなることが予測される。つまりこの2つの型には、「ムスメから」「ムスメだけ」という音調型が期待されるのだが、今回の青谷方言の調査では、ここに記されているように「ムスメから」「ムスメだけ」のように出現した。その理由は、今のところ不明である。

同じような語末核を持つ2拍の名詞「ヤマ（山）、ア^{*}（網）、ハナ^{*}（花）」などについても同様な不規則性が見られ、「だけ」が付くと予想通り「ヤマだけ」となったのに対して、「から」が付くと、「ヤマから」のように出現した（次の下線部参照）。

トリ（鳥） トリが トリも トリから トリだけ トリまで
 サル（猿） サルが サルも サルから サルだけ サルまで
 ヤマ（山） ヤマが ヤマも ヤマから ヤマだけ ヤマまで

これに対し、語頭のモーラにアクセントがある名詞「柱, 烏, 親子, 柘榴」に助詞「から」が接続した場合は、図2から分かるように、アクセントの置かれた語頭モーラが、上記の無核の名詞に助詞が続く場合よりも高い。またこのように有核の名詞から始まる場合は、その後ろに出現する二つ目のH音調（「から」の部分に出現するH）の高さが、相対的に低く抑えられることも分かる。

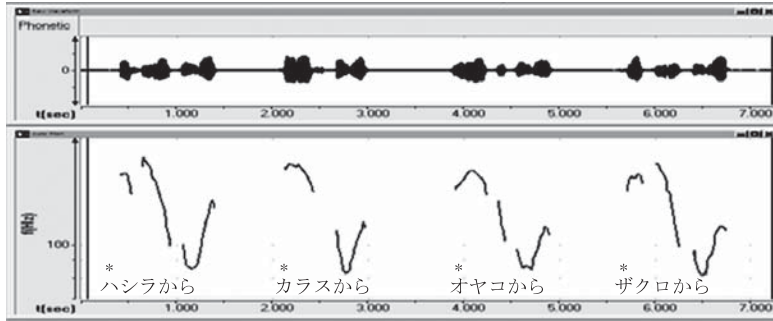


図2 有核型（柱, 烏, 親子, 柘榴）にカラが接続した場合の音調型

本稿ではこのような無核と有核の名詞から構成されるアクセント単位内のH音調の相対的な違いを、仮に、高い音調の場合は○のように上線で、中程度の高さの場合は○のように点線で示すことによって記述し分けることとする。したがって、たとえば青谷方言の「ヨモギから、ミミズから」と「*ハシラから、*オヤコから」との音調の違いは、「ヨモギから、ミミズから」対「ハシラから、オヤコから」のように記述し分けられる³。

2. 昇り核としての青谷方言のアクセント

さて、(1) でみた青谷方言の3モーラ語の音調型を、次の東京方言のそれと比較しながら検討すると、両者の音調には一見したところ、かなりの違いがあるように見える。

(2) 東京方言の音調⁴

- | | | | | | | |
|-----|-----|------|------|-------|-------|-------|
| (a) | ミミズ | ミミズが | ミミズも | ミミズから | ミミズだけ | ミミズまで |
| (b) | オヤコ | オヤコが | オヤコも | オヤコから | オヤコだけ | オヤコまで |
| (c) | イトコ | イトコが | イトコも | イトコから | イトコだけ | イトコまで |
| (d) | オトコ | オトコが | オトコも | オトコから | オトコだけ | オトコまで |

このように特に語末核の語の場合、（後に述べる規則1によって）2モーラ分高くなる、という原則が、厳密に当てはまらない場合があるようだが、その原因についての考察は今後の課題としたい。

³ 東北地方にも、これまで、似たような重起伏を持つ方言が報告されている（たとえば大西（1989）の岩手県の山田町や、田中（2005: 370-421）の岩手県の陸中宮古などである）が、それらにおいても、無核の名詞と有核の名詞を含むアクセント単位に出現するH音調には、同様な違いが見られることが予測される。その詳細な記述と分析も、今後の課題である。

⁴ ここでは便宜的に「オヤコにも」のように2つのH音調の山が出現するように記述しているが、○の部分は、そこでもう一度ピッチが上昇するというより、そのモーラの直後で、前の拍よりさらに低くなって付くようなピッチの型を示す。したがって、下がり目を] のような記号で示すとすれば、これは「オヤコに]」のように、1つのアクセント単位内に2つ下降があるような音調型となる。

本稿では、鳥取市の気高、青谷、湯梨浜町の泊、長和田、別所などのアクセントの調査報告⁵を行うと同時に、(1) のようなアクセントを「昇り核」を持つ方言の1つとして記述することを提案する。

まず、(1) に挙げられた語のうち、(1a) の「ミミズ (蚯蚓)」は無核の語で、その他は有核の語であると考えられる。後者のうち、(1b) の「オヤコ (親子)」は第1モーラ目に、(1c) の「アヤメ (菖蒲)」は第2モーラ目に、(1d) の「ムスメ (娘)」は第3モーラ目に、それぞれ核を持つ語であると考えられる。つまり、青谷方言の3モーラ語は、(3) に示すような体系を持っている⁶。(以下、●は高い音調、○は低い音調を示し、▲は高い音調の助詞、△は低い音調の助詞を示す。昇り核は、「で示すことにする。)

(3) 青谷方言のアクセント (3モーラ語の場合)

	〔単語単独の音調〕	〔1モーラの助詞 (～が, ～に, ～も) が付加した場合の音調〕	〔語例〕	〔昇り核による解釈〕
(a)	●○○	●○○▲	みみず 蚯蚓	○ ○ ○
(b)	●●○	●●○▲	おやこ 親子	「○ ○ ○
(c)	○●●	○●●△	あやめ 菖蒲	○「○ ○
(d)	●○●	●○●▲	むすめ 娘	○ ○「○

以下、高い音調を「H音調」と呼ぶことにすると、青谷方言では次のような規則が存在する。

(4) 規則1: 2モーラ1単位 (bimoraic-foot) によるH音調の実現

核を起点にして、2モーラを1単位としたH音調を実現させる。

このように、2モーラを1単位とした (bimoraic) H音調の山が形成されるタイプの昇り核方言は、青谷方言の他にも、隣接した泊方言に観察された。この鳥取県の青谷と泊のアクセント体系は、本土の西日本における数少ない「昇り核」のアクセント体系であると言えよう。従来、東北を中心に分布していると考えられている昇り核の体系は、このように (局地的ではあるが) 西日本にも存在する。

一方、このような「2モーラ1単位」のH音調を持つアクセント体系というのは、本土の他のn+1型アクセント体系には、まだ報告例がない。今後、典型的な昇り核を持つとされる東北各地

⁵ 調査は2009年3月に行われた。調査にご協力いただいた話者は、気高2名 (NT氏、男、昭和5年生:MK氏、男、昭和11年生)、青谷2名 (KT氏、男、昭和6年生:MY氏、男、昭和32年生)、泊2名 (TK氏、男、昭和12年生:HM氏、男、昭和22年生)、別所1名 (NY氏、男、昭和10年生)、長和田1名 (DY氏、男、昭和6年生) の方々である。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

⁶ 無核の3モーラ語には「ミミズ (蚯蚓)」の他にも「ヨモギ (蓬)、クルマ (車)、ネズミ (鼠)、ムスコ (息子)」などがある。また有核の語のうち、第1モーラ目に核があるものは「オヤコ (親子)」以外にも「ホーキ (箒)、ハシラ (柱)、カラス (鳥)、ザクロ (柘榴)」など、第2モーラ目に核がある語は「アヤメ (菖蒲)」の他に「アブラ (油)、イトコ (従兄弟)、アルジ (主)、オトナ (大人)」など、第3モーラ目 (語末モーラ) に核がある語は「ムスメ (娘)」の他にも「カガミ (鏡)、コムギ (小麦)、ナマズ (鯰)」などがある。(なお一部の話者で、語末核の「コムギ (小麦)、ナマズ (鯰)」が、別の型で出現することがあった。)

の n+1 型体系を中心に、さらに全国を詳細に調査してみる必要がある⁷。

3. 昇り核による n+1 型体系の形成

(4) のような 2 モーラを 1 単位とした H 音調実現の規則を持つ青谷、泊方言に対し、青谷の東隣の気高方言や、その西南に位置する東郷池周辺の湯梨浜町の別所、長和田などでは、昇り核の置かれた位置から 1 モーラ分だけ H 音調が現れ、青谷や泊のように H 音調が 2 モーラ続くというようなことはなかった⁸。次の例は、気高方言の 3 拍名詞の音調型である。

(5) 気高方言の 3 モーラ語の音調

(a)	ミミズ	ミミズが	ミミズも	ミミズから	ミミズだけ	ミミズまで
(b)	オヤコ	オヤコが	オヤコも	オヤコから	オヤコだけ	オヤコまで
(c)	アヤメ	アヤメが	アヤメも	アヤメから	アヤメだけ	アヤメまで
(d)	ムスメ	ムスメが	ムスメも	ムスメから	ムスメだけ	ムスメまで

(5) の例から分かるように、この気高方言では、アクセント核のある部分が 1 モーラ分だけ高くなっている（つまりこの方言には、(4) のような規則が存在しない）。そのためこの気高方言のアクセントは、「下げ核」なのか、「昇り核」なのかは、決められない。今、このような性質を持つアクセント核を「一拍卓立」の核と呼ぶことにして、仮に $\hat{\circ}$ のような補助的記号を使って示すことにしよう。そうすると、この方言は次のように示される。

(6) 気高方言のアクセント (3 モーラ語の場合)

	[単語単独]	[助詞 (～が, ～に, ～も) 付]	[語例]	[解釈]
(a)	●○○	●○○▲	蚯蚓	○○○
(b)	●○○	●○○▲	親子	$\hat{\circ}$ ○○○
(c)	○●○	○●○▲	菖蒲	○ $\hat{\circ}$ ○
(d)	●○○	●○○△	娘	○○ $\hat{\circ}$

おそらく (1) の青谷方言における、H 音調が 2 モーラ分続くような昇り核の体系も、この気高や別所などに観察されている、核の置かれたモーラが 1 モーラだけ高くなる音調型から生じたものだろう。

⁷ 似たような重起伏を持つ方言として知られる、大西 (1989) の記述による岩手県山田町のアクセントは、今回調査した青谷のそれと似ているようであるが、その H 音調の実現の仕方が異なる。たとえば山田町では、核のあるモーラから (2 モーラだけではなく)、アクセント単位内の最終モーラの直前までがすべて高くなって実現する。たとえば語頭に核のある「カブト (兜)」には、カブト、カブトモ (言い切り形) のように、当該のアクセント単位の最終モーラを残して、その直前のモーラまで H 音調が実現する。同じく「サクラ (桜)」という無核の語は、サクラ、サクラモ (言い切り)、語末核の「ヒガシ (東)」という語は、ヒガシ、ヒガシモ (言い切り) のように実現する。つまり山田町は、アクセント単位の末尾モーラ、あるいはアクセントによる上昇の実現するモーラの直前を「1 モーラ分だけ」低くし、その他のモーラをすべて高くする、というような特徴を持つようだ。(この大西 (1989) の記述に基づく解釈が、上野 (1992) にもある。)

⁸ この地域の他のアクセント体系について論じた先行研究にも、(1) の青谷方言にみられるような 2 モーラが 1 単位としてまとまって高くなる方言というのは、まだ報告例がない。

この地域一帯では、従来、(現在の気高や別所、長和田などに典型的に見られるような) ●○●のような「重起伏音調」が記述・報告されてきた⁹。このような重起伏音調も、本来は、1アクセント単位内に一拍卓立のアクセントが1つだけあるような体系から、(主として後述するような句音調のHの出現によって) ○○●>●○●のようなプロセスを経て、重起伏型を持つ体系へと発展したものだだろう。さらに青谷や泊においては(4)の規則1の出現によって、それが次第に「昇り核」を持つ体系へと変化したものと思われる¹⁰。

鳥取県の青谷や泊では、このように現在、昇り核の体系が生じつつあるが、それがどの程度の地域に広がっているのかは、今のところ未詳であり、今後さらなる調査が必要である。しかし、その方言に起こった(あるいは現在起こりつつある)変化の過程を記述しておくことは、「昇り核発生」のメカニズムについて、今後、考察していく上でも意義がある。これらの地域のアクセントは重点的に調査を行って詳細な記述を残し、その音声データを保存していきたい。

以上、3モーラ名詞を使って解釈を進めてきたが、他のモーラ数の単語も考慮しながら、この青谷方言の音調型を他のn+1型体系のものと比較してみよう。(7)は、青谷と同じくn+1型体系を持つ東京方言、気高方言と、青谷方言の音調型を並べて示したものである。(7a)の東京方言は「下げ核」によるn+1型体系であるのに対して、(7b)の気高方言は、核の部分が「一拍卓立」のn+1型体系である。一方、(7c)の青谷方言は、「昇り核」によるn+1型体系である。

(7) 各種のn+1型体系(下げ核、一拍卓立、昇り核)

a. 東京方言のアクセント

柄, 柄が	トリ, トリが	クルマ, クルマが	ニワトリ, ニワトリが
絵, 絵が	フネ, フネが	カラス, カラスが	フジサン, フジサンが
	ヤマ, ヤマが	イトコ, イトコが	クダモノ, クダモノが
		ムスメ, ムスメが	ヒラガナ, ヒラガナが
			モノサシ, モノサシが

b. 気高方言のアクセント

柄, 柄が ¹¹	トリ, トリが	クルマ, クルマが	ニワトリ, ニワトリが
絵, 絵が	フネ, フネが	カラス, カラスが	フジサン, フジサンが
	ヤマ, ヤマが	イトコ, イトコが	クダモノ, クダモノが
		ムスメ, ムスメが	タマネギ, タマネギが
			モノサシ, モノサシが

⁹ この重起伏は「台頭後起」の型とも呼ばれ、特に今石(1982)において詳しく論じられている。

¹⁰ ところで東北でも、たとえば山形県鶴岡市などに、アクセント核の部分が1モーラ分だけH音調になる「一拍卓立」のアクセントが報告されている(新田1994)。岩手県の雫石や青森県の弘前などの「昇り核」体系も、もともとは、現代の鶴岡方言のような「一拍卓立」の核を持った体系を経て生じてきた可能性が高い。

¹¹ 気高や青谷を中心としたこの地域の1モーラ語のアクセントの正確な記述は、広戸・大原(1952)以来の課題である。無核の「柄」と有核の「絵」の音調型の違いは、次のように(助詞連結も含めて)2モーラ以上助詞が接続した場合には比較的明瞭に区別できる。

c. 青谷方言のアクセント

柄, 柄が ¹¹	トリ, トリが	クルマ, クルマが	ニワトリ, ニワトリが
絵, 絵が	フネ, フネが	カラス, カラスが	フジサン, フジサンが
	ヤマ, ヤマが	イトコ, イトコが	クダモノ, クダモノが
		ムスメ, ムスメが	タマネギ, タマネギが
			モノサシ, モノサシが

これら3種の異なるタイプのn+1型体系には、(その表面レベルの違いにもかかわらず)共通点が多い。まず、3者は体系が似通っている。その体系における共通点を捉えるために、あえて「下げ核、一拍卓立、昇り核」などの区別をせず、アクセント核のあるモーラの位置を*で示すことにすると、(7)に示した3種の異なるn+1型体系の方言は、すべて、次のような体系を持っているものとして記述できる。(ただし各型の所属語彙は、方言によって多少異なる。)

(8) 東京, 気高, 青谷方言のアクセント体系

柄	トリ (鳥)	クルマ (車)	ニワトリ (鶏)
*絵	*フネ (舟)	*カラス (鳥)	*フジサン (富士山)
	ヤマ (山)	イトコ (従兄弟)	*クダモノ (果物)
		ムスメ (娘)	*タマネギ (玉葱)
			*モノサシ (物差し)

このように、(7)の3種の方言は、(その表面の音調実現の違いにもかかわらず)同じアクセント体系を持っている。

4. 句音調による重起伏の出現

さて、これまでの多くの先行研究が、この東郷池周辺の方言(鳥取市の気高から、湯梨浜町および倉吉市に至る地域の方言)を、1つのアクセント単位内に2つのH音調の山を持つ「重起伏」

柄だけ 対 絵だけ, 柄から 対 絵から, 柄ぐらい 対 絵ぐらい,
柄までも 対 絵までも, 柄にまで 対 絵にまで, 柄からも 対 絵からも,
柄からまで 対 絵からまで, 柄でさえ 対 絵でさえ
これに対して1モーラ助詞「~が, ~も, ~に, ~を」が接続した場合は、両者の聞き分けが難しい。たとえば、無核の「柄, 蚊」および有核の「絵, 田」に助詞ガを付けて「柄が, 蚊が, 絵が, 田が」のように言い切ってもらうと、「柄が, 蚊が」の出だしの高さは「絵が, 田が」の場合ほど高くない等、両者には違いが見られる。しかし、この違いを、HとL(あるいは●と○)という2値的な記述によって行うことは難しい。この点に関連して、広戸・大原(1952: 53)は、次のように記述している。

「頭高の『絵・尾…』に助詞のガを接続さず時、アクセントの山が1つずつずれて助詞に移行するため、平板の如く聞え、『絵ガ』と『柄ガ』、『粉ガ』と『子ガ』の区別が、他地方ほど判然としない。」
筆者の観察では、「絵, 尾, 田」などの有核の1拍名詞に助詞ガが接続すると、「アクセントの山がずれる」というより、むしろ助詞に中音調が実現するように聞こえる。つまり、高いピッチからやや中程度に下降するHMのような音調型が「絵が, 尾が, 田が」などに出現するようだ。上述のような広戸・大原(1952: 53)の記述はこのことを示しているのではないか、と思われる。

したがって、「柄が」対「絵が」のピッチの違いをあえて記述し分けるとすれば、MM対HMのようになるだろう。いずれにしても、この地域の1モーラ名詞の音調型の違いを正確に記述し分けるためには、今後、音響分析が欠かせない。

音調の方言として記述してきた。しかし、その重起伏の2つのH音調の山のうちの1つは、文中では弱化する場合が多い。たとえば青谷では、助詞付き言い切り形「ミミズが」「オヤコが」などでアクセント単位の末尾に生じているH音調が、「～見える」「～並ぶ」等の述語をその後ろに付けてみると「ミミズが…」「オヤコが…」のように消失する。そのため、言い切り形では重起伏であっても、後ろに述語が付く「接続形」では、H音調の山は1つしか出現しない¹²。このように接続形で消滅するH音調は、一種の「句音調」として捉えることができる。このような特徴を示す方言の典型例として、以下に湯梨浜町の長和田方言のデータから、いくつか例を挙げてみよう。

(9) 長和田方言の3モーラ語の音調¹³

(a) ミミズ (蚯蚓)	ミミズが	ミミズが見える	ミミズから	ミミズから読んだ
(b) オヤコ (親子)	オヤコが	オヤコが見える	オヤコから	オヤコから読んだ
(c) アヤメ (菖蒲)	アヤメが	アヤメが見える	アヤメから	アヤメから読んだ
(d) ムスメ (娘)	ムスメが	ムスメが見える	ムスメから	ムスメから読んだ

たとえば、語頭のモーラにアクセントを持つ(9b)の「オヤコ」という語に助詞を付けて言い切る場合には、「オヤコが」「オヤコから」のように助詞の最終モーラにH音調が生じる。しかしそれに述語を付けて文を作ると、「オヤコが見える」「オヤコから読んだ」のように、そのH音調は消失(あるいは弱化)する。同様に、(9a)の無核の語「ミミズ」から成るアクセント単位も、単独形や、助詞を付けて言い切る場合には、「ミミズ」「ミミズが」「ミミズから」などのように、その最終モーラにH音調が出現する。ところが、それを「～見える」「～から読んだ」のような文に入れて発話してもらうと、「ミミズが見える」「ミミズから読んだ」のように、助詞「が」「から」に生じていたH音調は消失する。

このように、言い切り形でアクセント単位の末尾に出現するH音調が、接続形になって文中に入ったとたんに消失(弱化)する、という現象は、この長和田のみでなく、別所、泊、青谷、気高など、この東郷池周辺の地域全般にわたって観察された。

また、アクセント単位の初頭部分に出現するH音調の一部にも、同様な現象が観察される場合があった。たとえば(9)で語末に核がある語「ムスメ」と語頭に核がある語「オヤコ」の音調型を比較してみよう。ムスメのように語末にアクセントがある単語の場合は、核のあるモーラが高くなるだけでなく、「ムスメが」のように語頭のモーラにH音調が出現することがある。しかし、この場合の語頭に出現するH音調は出現しないことも多い。(どのような条件でそれが出

¹² 同様に、「オヤコから」「オヤコだけ」「アヤメから」「アヤメだけ」「ムスメから」「ムスメだけ」などに見られるアクセント単位末尾の高い音調も、助詞で言い切る時には出現するが、この後に述語が接続して文になると、出現しない。

¹³ ここでは仮に「オヤコが見える」「オヤコから読んだ」のように記述してあるが、これらの文に出現する2つ目のH音調は、その部分だけが高くなるというより、むしろその部分を起点にして、2つ目のさらなる下降が生じるように聞こえる。つまり、下がり目[]で示すとするとこれらは、

[オ]ヤコが見え]る、[オ]ヤコから読]んだ
のように、]の部分で徐々に下降していくような音調型で実現する。

現、あるいは消滅するののかについては、現時点では未詳である。) 今回調査した方言の中でも、特に別所方言では、「ムスメ^{*}からもらう」のように、H 音調が消失することが多かった¹⁴。

これに対して、「オヤコ」のように語頭にアクセントを持つ単語の場合は、その語頭に出現する H 音調は、言い切り形ではもちろんのこと、接続形でも「オヤコに…、オヤコから…」等、どちらにおいても決して消失することはない。

これは、前者が句音調によって現れた H 音調なのに対して、後者がアクセント核によって出現した H 音調である、という大きな違いがあるためである。

このことから、この東郷池周辺に広く観察されている重起伏音調のうちの、アクセント単位の初頭や末尾（助詞がついた場合は、その助詞の最後のモーラ）に出現する H 音調の一部は、各単語に固有に備わった性質なのではなく（つまりアクセントによって導入される H 音調ではなく）、一種の「句音調」であると解釈することができる。（したがって、これはレキシコンには書き込まれない。）

5. 東京方言との対称性と共通性

さて、ここで本稿の第 2 節で「昇り核体系」として解釈した青谷方言の記述に話をもどそう。

第 3 節では、青谷方言と東京方言とはその表面の音調型がかなり異なるにもかかわらず、そのアクセント体系は共通していることを見てきた。実は、同じような n+1 型体系を持っている青谷方言と東京方言のアクセントは、次の (10) に示されているように、ちょうど対称的になっており、この対称性は主として、「昇り核か、下げ核か」という違いに起因する。

(10) 青谷方言と東京方言の対称性

	青谷方言	東京方言
(a) 蚯蚓 (ミミズ)	○ ○ ○	○ ○ ○
(b) 親子 (オヤコ)	[○ ○ ○	○] ○ ○
(c) 従兄弟 (イトコ)	○ [○ ○	○ ○] ○
(d) 娘 (ムスメ)	○ ○ [○	○ ○ ○]

つまり、この 2 つの n+1 型体系の表面的な違いは、次のような核の持つ性質の違いによって生じている。

(11) 東京方言と青谷方言の違いの原因

青谷：上昇位置が弁別的

東京：下降位置が弁別的

¹⁴ この地域の句頭の H 音調については、広戸・大原 (1952: 30) においても次のような記述がある。「平板型は更に特徴があつて、サケ・サケガ・サケダ 酒、サクラ・サクラガ・サクラワ 桜、イワシ・イワシガ 鯛、フトコロ・フトコロガ 懐、テヌグイ・テヌグイダ 手拭 となる。第一音節の…線はやゝ高く聞えると云う意味で…にしたが、これは高いと云うよりも、むしろ強調している為であるかも知れない。調査者が、やゝ高めに発音を真似て見ると、違ふと答ふる～(以下省略)」。おそらくこの「やや高く聞こえる」音調は、アクセント単位の頭に出現する「句音調」であると考えられる。

核の性質に起因するこのような対称性は、これまでも、下げ核の東京方言と昇り核の青森県弘前方言との間などにも指摘されてきた（上野 1977）が、同様な対称性が、東京方言と青谷方言との間にも見られる、と言えるだろう。

そればかりでなく、この東郷池周辺から気高に至るまでの地域に観察されている n+1 型アクセント体系は、その助詞のアクセントについても東京方言との共通性が多い。たとえば東京で無核の助詞と考えられる「が、も、に、を、から、だけ」は、鳥取のこの地域でも無核となっている。また、東京で有核の「^{*}まで、^{*}ぐらい」は、この地域でもやはり有核となっている。（他の助詞については、今後の検討課題としたい。）

たとえば、青谷と東京の無核の名詞（「車、蓬、蚯蚓、鼠、息子」など）に、無核の助詞「～が、～も、～に、～を、～から、～だけ」などが付加すると、次のような音調型が出現する。（なお、青谷方言の例で各アクセント単位の最後に出てきている H 音調は句音調である。）

(12) 無核の 3 モーラ名詞に無核の助詞を付けた場合の青谷と東京の音調型

	単独	～が、～も、～に、～を	～から、～だけ
青谷方言	●○●	●○○▲	●●○▲▲
東京方言	○●●	○●●▲	○●●▲▲

ここから、東京で無核のこれらの助詞は、青谷でも無核型であることが分かる。

次に、同じ無核の名詞（「車、蓬、蚯蚓、鼠、息子」など）に有核の助詞「～^{*}まで、～^{*}ぐらい」を付けて、青谷と東京の音調型を比較すると、次のようになる。

(13) 無核の 3 モーラ名詞に有核の助詞を付けた場合の青谷と東京の音調型

	単独	～ [*] まで	～ [*] ぐらい ¹⁵
青谷方言	●○●	●●○▲▲	●●○▲▲△
東京方言	○●●	○●●▲▲	○●●▲▲△

ここから、有核の助詞「^{*}まで、^{*}ぐらい」は、東京でも、青谷でも、同じように有核であることが分かる。

以上、各助詞の持っているアクセント情報を以下にまとめると、(14) のようになる。ここでは青谷と東京の共通性を捉えやすくするため、「下げ核」と「昇り核」の違いをあえて示さずに、アクセント核の置かれた場所を * で示してある。

(14) 助詞のアクセント（青谷、東京）

無核の助詞： が、も、に、を、から、だけ

有核の助詞： ^{*}まで、^{*}ぐらい

下げ核を持つ東京方言では、たとえば「ミミズ^ーまで」「ミミズ^ーから」のように、アクセント単位全体に 1 つの「ピッチの山」が形成されることによって、そのアクセント単位のまとまりが示

¹⁵ 青谷方言の有核の助詞「^{*}ぐらい」は、規則 1 の影響を受けて、●●○▲▲△（例：オヤコ^ーぐ^ーらい）となり

される傾向がある。これに対し、昇り核で重起伏音調を持つ青谷方言では、「ミミズ^へまで」「ミミズ^へから」のように、1つのアクセント単位内に2つの H 音調の山が形成されることが多い。つまり青谷では、アクセント単位に1つの「ピッチの谷間」が形成される傾向がある、と言えるだろう。

このような表面的な違いはあるものの、両者とも、そのアクセント体系や、レキシコンに書き込んでおくべき情報については、かなり共通点が多いということが判明した。

6. 東京方言との比較（アクセント体系の類型論）

以上、昇り核の青谷方言と下げ核の東京方言との間には共通点が多いことが分かったが、さらに両者を詳細に比較してみると、このような体系やレキシコン内部の情報の類似だけでなく、表面の音調型を導く規則にも、両者には共通点が多いことが判明した。

その1つは、2つの助詞が連続した場合（以下、「助詞連結」という言葉を使用する）の、あらたな H 音調の発生にかかわるものである。もう1つは、2つ以上の H 音調が1つのアクセント単位内に連続した場合の「異化」の現象にかかわるものである。（以下、6.1 節で前者を、6.2 節で後者を扱う。）

6.1 助詞連結に生じるアクセント——形態素境界における H 音調の発生

たとえば青谷方言の無核の名詞（ミミズ）、有核の名詞（オヤコ、アヤメ、ムスメ）に、「～に+も」「～から+も」「～だけ+から」「～に+まで」「～から+まで」のように、助詞が複数個連結して接続する場合を考えてみよう。このような場合、青谷方言ではそれらの助詞連結の部分に H 音調があらたに発生する。（15）の例は、それを示す¹⁶。

(15) 青谷方言における助詞連結の音調

ミミズ ^へ にも	ミミズ ^へ からも	ミミズ ^へ だけから
オヤコ ^へ にも	オヤコ ^へ からも	オヤコ ^へ だけから
アヤメ ^へ にも	アヤメ ^へ からも	アヤメ ^へ だけから
ムスメ ^へ にも	ムスメ ^へ からも	ムスメ ^へ だけから

たとえば、「ミミズ」という無核の名詞に、無核の助詞「に」と「も」の助詞連結が続くと、「ミ

そうだが、実際は●●○▲△△（例：オヤコ^へぐらい）となって出現した。なぜかこの助詞は、規則1の影響を受けにくい傾向があるようだが、その理由は今のところ不明である。（しかし、2拍の無核の名詞に同じ助詞がついた場合には、「トリぐらい」のように2モーラ分高くなることもあった。なぜこのような違いが生じるのかは、今後の課題としたい。）

¹⁶ このように助詞が連結した場合にあらたに生じた H 音調も、規則1の影響を受けて2モーラ分の長さで出現することが予測されたが、今回の調査ではそのような現象は観察されなかった。したがって、たとえば「オヤコ^へからも」「オヤコ^へだけから」は、「オヤコ^へからも」「オヤコ^へだけから」のようになることは（少なくとも今回調査した青谷の話者2名に関しては）なかった。この助詞連結によってあらたに導入されたアクセントは、本来レキシコンに書き込まれているアクセントとは、このような点で、少し違うふるまいをしているように見える。しかし今回調査した話者の情報だけに基づいて、これが青谷方言の一般的特徴であると断定できるどうかは分からない。今後、話者の数を増やして、さらに検討してみる必要があるだろう。

「ミズに+も」のように、助詞の切れ目の直前のモーラに、あらたに H 音調が出現する。同様に、「から」と「も」が連結すると「ミミズから+も」、「だけ」と「から」が連結すると「ミミズだけ+から」、といったように、形態素の切れ目の直前のモーラ、すなわち前部の助詞の最終モーラに、「に+も」「から+も」「だけ+から」というように、H 音調があらたに生じていることが、(15)の例から分かる。

このように、その助詞の境界 (+) の直前のモーラにアクセントが付与される現象を、今、仮に次のような規則で説明しておくことにしよう。

(16) 規則 2: 助詞連結によるアクセント付与規則¹⁷

助詞+助詞の場合は、その形態素境界の直前のモーラにアクセントを付与する。

これは青谷だけでなく、今回調査した他の方言（気高、泊、別所、長和田）にも共通してみられる特徴である¹⁸。

この規則 2 は、実は東京方言にも存在する。東京の無核の助詞「から、だけ、も、に」を連結させて「に+も」「に+だけ」「から+も」「だけ+から」のような助詞連結を作ると、東京でも「に+も、に+だけ、から+も、だけ+から」の下線部分、つまり形態素境界の直前のモーラに H 音調が生じる¹⁹。このことは次のように、無核の名詞（ミミズ）、有核の名詞（オヤコ、イトコ、

¹⁷ 本来「アクセント」というものは、「単語ごとに、もともとレキシコンに記述してある情報」のことを示す。したがって形態素の連結部分に「アクセント」があらたに「生じる」というのは、この考え方と矛盾している。しかし現時点では、このようにアクセントがレキシコン内部の規則（つまり lexical な規則）の結果として生じることがある、と考えておく。

ちなみに、このように形態素が連結した場合にその境界点（またはその近辺）にあらたにアクセントが生じるという現象は、東京方言の複合名詞アクセント規則や、鳥取を代表とする中国地方の複合動詞アクセント規則（広戸・大原 1952: 44-5）などにも通用する。一般性の高い規則なのではないかと考えられる。今、名詞、動詞、助詞の違いにかかわらず、形態素を X で表すとすれば、「X が連続した場合（X+X の場合）は、その境界（あるいは境界にできる限り近い部分）にアクセントを置く」というような規則が、日本語アクセント体系一般に観察されるもの、と言える。

¹⁸ 長和田、別所方言の話者の発話では、全体的に言って、文中で後ろのほうの H 音調が弱化・消失する傾向が強く見られた。たとえば「コドモに」の言い切り形で助詞に実現する句音調の H は、「コドモに会う」では、低く抑えられる。しかしこのような方言においても、この助詞連結によってあらたに生じた H 音調は、非常に明瞭に出現する場合が多く、それらが弱化・消失することはなかった。以下はコドモ（無核）、オヤコ、オトナ、ムスメから始まる文の音調である。／より右に示した例によって、このような助詞連結によって生じた H 音調は、けっして弱化しないどころか、かなり明瞭な H 音調で出現していることが確認できる。

- (a) コドモに会う コドモからもう / コドモにも会う コドモからだけでももう
 (b) オヤコに会う オヤコからもう / オヤコにも会う オヤコからだけでももう
 (c) オトナに会う オトナからもう / オトナにも会う オトナからだけでももう
 (d) ムスメに会う ムスメからもう / ムスメにも会う ムスメからだけでももう

¹⁹ 「に、から、だけ」など本稿で無核とした助詞は、本来、語末にアクセント核をもっている「有核の助詞」（すなわち「に、から、だけ」）と考えておくことも、理論的には可能である。しかしすべての助詞連結にこのようなことが生じるため、この下がり目の出現は、完全に予測できる。このような場合、この情報は単語ごとに辞書に書き込んでおく必要はない。そのため本稿では、これを規則で導くことにするのである。

さらにこれに付け加えて、音声的事実も以上の考え方を支持しているように思われる。今、高い音調を H、低い音調を L、中くらいの音調を M でそれぞれ表すとす。たとえばカゼ（風）、クルマ（車）のように、東京方言で無核の名詞は、「風吹いた」「車降りた」のように、語頭に核を持つ述語が後続して文を形成した場合、カゼフィット（LHHLL）、クルマキタ（LHHHL）のような音調型となって出現する。これに対して、ヤマ、オトコのような語末核の名詞と同じような語頭に有核の述語が接続した場合には、その名詞直後に、中程度の下がり目を感じられる。たとえば「ヤマ降りた」「オトコ来た」は、それぞれ「ヤマオリタ（LHMLL）、オトコキタ（LHHML）のような音調型となる。このように、無核の名詞と、語末核の名詞とでは、後に続く述語部分の音声の実現が異なる。

6.2 H 音調の隣接回避の傾向

どのようなアクセント体系においても、1つのアクセント単位内に異なるアクセント核に由来するH音調が、隣接して連続してしまう場合がある。たとえば「ムスメ^{*}+^{*}まで」は、有核名詞「ムスメ^{*}」の核からもたらされたH音調と、有核の助詞「^{*}まで」によって生じたH音調が隣接して、1つのアクセント単位内に生じている。このような場合、そのH音調の連鎖を回避するため、青谷では、前のほうのH音調が実現して、後ろのほうに実現するH音調が弱化（消失）する。したがって、たとえば「ムスメ^{*}+^{*}まで」は、「ムスメ^{*}まで」ではなく、「ムスメ^{*}まで」のような音調型となる。このような現象が青谷方言に一貫して起こることは、次のようなさまざまなアクセント単位内の音調を観察すると分かる。（無核：ミミズ、有核：オヤコ、アヤメ、ムスメ）

(20) 青谷方言における助詞連結の音調

ミミズ ^ˉ ぐ ^ˉ らい	ミミズ ^ˉ ま ^ˉ で	ミミズ ^ˉ ま ^ˉ でも	ミミズ ^ˉ に ^ˉ ま ^ˉ で	ミミズ ^ˉ か ^ˉ ら ^ˉ ま ^ˉ で
オヤコ ^ˉ ぐ ^ˉ らい	オヤコ ^ˉ ま ^ˉ で	オヤコ ^ˉ ま ^ˉ でも	オヤコ ^ˉ に ^ˉ ま ^ˉ で	オヤコ ^ˉ か ^ˉ ら ^ˉ ま ^ˉ で
アヤメ ^ˉ ぐ ^ˉ らい	アヤメ ^ˉ ま ^ˉ で	アヤメ ^ˉ ま ^ˉ でも	アヤメ ^ˉ に ^ˉ ま ^ˉ で	アヤメ ^ˉ か ^ˉ ら ^ˉ ま ^ˉ で
ムスメ ^ˉ ぐ ^ˉ らい	ムスメ ^ˉ ま ^ˉ で	ムスメ ^ˉ ま ^ˉ でも	ムスメ ^ˉ に ^ˉ ま ^ˉ で	ムスメ ^ˉ か ^ˉ ら ^ˉ ま ^ˉ で

たとえば、「ムスメ^{*}+^{*}ぐらい」「ムスメ^{*}+^{*}まで」が「ムスメ^ˉぐらい」「ムスメ^ˉマデ」のような音調型で出現するのは、次のように、連続したH音調のうちの、後ろのH音調が弱化してL音調に変化することによるものである。（以下、H音調が隣接して連続している部分を下線部で示す。）

(21)	ムスメ [*] + [*] まで	→	ムスメ [*] + [*] まで
	<u>H H</u>		H L
			[後ろのHが弱化]

また「ムスメ^{*}+^{*}に+^{*}まで」の場合は、助詞の連結部分に(16)の規則2によってあらたに核が生じ、「ムスメ^{*}+^{*}に+^{*}まで」のようなになる。そうすると次のように異なる核によってもたらされたH音調が3つ、隣接して連続することになる。

(22)	ムスメ [*] + [*] に+ [*] まで	→	ムスメ [*] + [*] に+ [*] まで
	H H	規則2	H <u>H</u> H

このように同じアクセント単位内に、別のアクセント核からもたらされたH音調が、隣接して複数個、連続してしまった場合には、実際に実現するのは一番はじめ（左側）のH音調だけである。その直後のH音調はすべて低く抑えられてしまう。そのために「ムスメ^ˉに^ˉまで」のような音調実現となるのである。

上述の現象を捉えるために、(23)のような規則をたてておこう。これによって、各アクセント単位内の一番左側（一番はじめ）のH音調が優先的に出現し、右側（後ろのほう）のH音調が弱化してL音調に変化するものとする。

(27) 東京方言におけるオトコ^{*}とミミズに助詞連結が接続した場合

a. オトコ^{*}+に+^{*}まで → オトコ^{*}+に^{*}+^{*}まで →
 | | 規則 2 | | | 規則 3
 H H H [H] H

オトコ^{*}+に^{*}+^{*}まで → オトコ^{*}+に+^{*}まで
 | | | | | |
 H L L H L L

b. ミミズ+に+^{*}まで → ミミズ+に^{*}+^{*}まで →
 | | 規則 2 | | 規則 3
 H [H] H

ミミズ+に^{*}+^{*}まで → ミミズ⁻+に⁻+⁻まで
 | |
 H L

東京方言の「オトコ^{*}+に+^{*}まで」が「オトコ^{*}+に+^{*}まで」のような音調実現をするのは、(27a)に示したように、アクセント単位内の最初の核（オトコ^{*}の語末の核）によってもたらされたH音調のみを残して、隣接するH音調がすべてL音調へと変化してしまうためである。

これに対して、東京方言の「ミミズ+に+^{*}まで」の場合は、「ミミズ⁻+に+⁻まで」のように助詞の「に」の直後に下がり目が実現する。これは、規則2によって助詞連結部分（「に」の部分）にあらたに生じたH音調が、「マデ」の第1モーラ目を実現するはずのH音調を、規則3によって弱化（消去）してしまうからである。

東京方言の有核（語末核）の名詞「オトコ^{*}」から始まるアクセント単位と、無核の「ミミズ」から始まるそれとの音調実現の違いは、次のような例に典型的に観察できる。

(28) 東京方言の有核のオトコ^{*}と無核のミミズから成るアクセント単位の音調型

ミミズ [*] まで	ミミズにも	ミミズ [*] までも	ミミズからも	ミミズに [*] まで
○●●▲△	○●●▲△	○●●▲△△	○●●▲▲△	○●●▲△△
オトコ [*] まで	オトコ [*] にも	オトコ [*] までも	オトコ [*] からも	オトコ [*] に [*] まで
○●●△△	○●●△△	○●●△△△	○●●△△△	○●●△△△

これらの音調型もすべて、規則3（HH → HL）を想定することによって説明することができる。

以上のことから、青谷と東京という2つの異なったタイプのn+1型体系は、両者とも、1つのアクセント単位内のH音調の連続を回避しようとする傾向があることが分かった。この規則3によって導かれたHH → HLという現象は、アクセント単位内部で「隣接」することになったH音調どうしの上に生じ、2つ目以降のH音調をすべてL音調に変化させてしまうものである。これは1つのアクセント単位内にH音調が連続して生じるのを回避するために起こる現象であり、その点から言えば、一種の「異化」現象と言うこともできる²⁰。

²⁰ 一般的にアクセント言語には、2つ以上の核が同じアクセント単位、句、文の中に共起した場合、その核

したがって、これは、他の日本語諸方言のアクセント体系にも、もっと広く観察されてもおかしくない。つまり次のような一般原則が、日本語諸方言のアクセント言語において、その音調実現を支配しているものと想定される。

(29) H 音調隣接回避の原則²¹

異なる核から由来する H 音調は、隣接して連続しない。

この原則に違反した場合は、H 音調どうしの「異化」によって、規則 3 が引き起こされる、と考えるのである。このためこの原則（およびこれと関連した規則 3）は、おそらくかなり一般性の高いものだろう²²。この点を視野に入れながら、今後の諸方言のアクセント記述調査を行っていききたい。

以上をまとめると、青谷と東京は、その表面的な音調型だけに着目すると、かなり異なる体系のように見えるのだが、両者には同じ規則が存在し、共通した原則に従っていることが分かった。

この節では、特に青谷方言に焦点を当てて論じてきたが、実は青谷周辺の諸地域（気高、泊、別所、長和田）でも、本節で論じたことはすべて当てはまる。つまり、今回調査することのできたこれら鳥取県の方言のすべてにおいて、東京方言と同様、①助詞が二つ以上連結するとその連結部にあらたな核が生じ、さらに②「H 音調隣接回避の原則」によって、2 つ以上の H 音調が連続して生じるのを避ける、という傾向が観察された。

7. まとめ

本稿では、まず青谷方言のアクセント体系を「昇り核」で記述することを提案した。そしてこの方言が、西日本における数少ない昇り核の方言として、典型的に見て重要であることを述べた。昇り核発生メカニズムや音調型変化の通時的プロセスに関して、今後考察を行っていく上でも、この青谷周辺の諸地域のアクセントの記述研究は意義あるものと考えられる。

本稿は、「核の置かれたモーラから 2 モーラだけ高くする」というタイプの昇り核が、日本語の中に存在することを報告したが、果たしてこのようなタイプの昇り核方言は、日本語諸方言の中で特殊なタイプのものなのか。これについては、今後、他の昇り核の諸方言を詳細に調査しながら、検証していかなければならない。今後の記述研究の課題である。

を実現させる H 音調の高さが、後ろのほうに行くにしたがって低くなっていく「ダウンステップ」という現象が見られる。たとえば、「シ'カゴからボ'ストンまで行った。」という文を例にとると、「ボ'ストン」の核部分の H 音調の高さは、文の出だしの「シ'カゴ」の核部分の H 音調の高さよりも、低く下がって実現する。このようなダウンステップ現象は、アクセント言語に共通して観察されるものである。このような視点から見ると、本稿の規則 3 (HH → HL) は一種のダウンステップ（の究極の姿）である、と見ることも可能だろう。

²¹ これは OCP によって生じたと考えることもできる。

²² 以前に筆者は、日本語のピッチアクセント体系にはアフリカ諸言語に広く観察されている Meussen's Rule (HH → HL) に相当するものが、未だ観察・報告されていない、と述べたことがある (Matsumori 1999)。しかし、本稿で提示した青谷と東京に共通して見られるこの規則 3 は、Meussen's Rule と本質的には同じものと言えるのではないだろうか。いずれにせよ、系統のまったく異なる言語間で、このように類似した現象が起こることは、類型論的に見て興味深い事実である。

次に本稿では、(その表面の音調パターンについては、下げ核を持つ東京のものとはかなり異なるように見える) 青谷方言が、実は東京方言と同じような特徴を共有していることを論じた。つまり両者とも、(1) 助詞の境界点にあたりに(辞書には含まれていない)核が出現する、(2) 複数のH音調が連続する場合、左側を優先的に実現させ右側を弱化(消失)させる、という2点において共通している。

つまり(その表面の音調型の違いとはうらはらに)、実は、東京方言と、本稿で論じた鳥取県の諸方言とは、非常に似通ったアクセントの仕組みに従っているのである。そして、これらの方言に共通して観察される特徴は、おそらく他の日本語のアクセント体系にも観察できる特徴である可能性が高い。特に(29)の原則、およびそれに関連した(23)の規則3は、他の諸方言のアクセント体系にも一般的に見られるものではないかと思われる。これは、アクセントの類型的考察を念頭に入れた諸方言の記述研究において、今後の1つの研究課題となるだろう。

参考文献

- 広戸惇・大原孝道(1952)「第3節 因幡・東伯の特殊地帯について」鳥根県立教育研究所(編)『山陰地方のアクセント』53-55. 松江:鳥根県立教育研究所.
- 今石元久(1982)「台頭後起型アクセントの研究—鳥取県(因幡国)気高郡青谷町夏泊方言のばあい—」飯豊毅一ほか(編)『講座方言学8』535-559. 東京:国書刊行会.
- Matsumori, Akiko (1999) Comments: Some aspects of tone in Tetela: Constraints and rules. *Proceedings of the Symposium: Cross-linguistic studies of tonal phenomena: tonogenesis, typology, and related topics.* 255-259. ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- 森下喜一(1996)「鳥取県青谷町方言アクセントの特徴について」『鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学』47(2):157-170.
- 室山敏昭(1969)「アクセントの山の以降の意味するもの—鳥取県倉吉市方言の場合—」『国語国文』38(5):107-119.
- 新田哲夫(1994)「鶴岡方言のアクセント」国立国語研究所(編)『鶴岡方言の記述的研究—第3次鶴岡調査報告1—』81-140. 東京:国立国語研究所.
- 大西拓一郎(1989)「岩手県山田町のアクセント」『国語学研究』29:1-10.
- 田中宣廣(2005)『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』東京:おうふう.
- 上野善道(1977)「日本語のアクセント」大野晋・柴田武(編)『岩波講座日本語』第5巻:281-321. 東京:岩波書店.
- 上野善道(1992)「昇り核について」『音声学会会報』199:1-13.

A Rising Kernel Dialect and the Accentual Systems surrounding Aoya in Tottori Prefecture

MATSUMORI Akiko

Japan Women's University
Invited Professor, Department of Language Change and Variation,
National Institute for Japanese Language and Linguistics

Abstract

The purpose of this paper is to show that the accentual system of the dialects of Aoya and Tomari is an n+1-type system with a 'rising' kernel, which developed from the kind of system observed in nearby areas in Tottori such as Kedaka, Bessho, and Nagouda, in which accent is marked with a one-mora H tone. The paper further argues that the accentual systems of all these dialects show the following features:

- (a) A boundary between consecutive particles is marked with an inserted accent.
- (b) When two or more adjacent H tones occur in an accentual phrase, all of the H tones except for the leftmost are changed to L (HH→HL), due to dissimilation.

The paper then proposes a generalization, based on the fact that these features are also seen in the Tokyo dialect: the features described above, especially (b), are basic characteristics observed in a number of other accentual systems in Japan.

Key words: rising kernel, Tottori prefecture, typology, n+1-type accentual system, boundary tones